



清輔奧儀抄 三

都留文科大学附属図書館所蔵

奥義抄中 釋

目錄

後拾遺歌三十八首

- 一 初志の歌
- 二 秋の夜半
- 三 夕月の歌
- 四 夕月の夜半
- 五 夕月の夜半
- 六 夕月の夜半
- 七 夕月の夜半
- 八 夕月の夜半
- 九 夕月の夜半
- 十 夕月の夜半
- 十一 夕月の夜半
- 十二 夕月の夜半

付錦標
奥義抄の
錦

三十 三つしんせめん

ほろぬる

うさこのまひ

このまひ

上陽人 三つしんせめん 付揚貴妃

うさこのまひ

れいしんせめん 船

らりんせめん

そとせめん

たのぬる

かたぬる

まゆぬる

ゆりぬる

拾遺歌止一首

一 三つしんせめん

三 三つしんせめん 付三つしんせめん

五 やまぬる

七 わるぬる 付三つしんせめん

四十 かくしんせめん

六十 山

八十 山

十二 山

二九 玉照君 三つしんせめん

四九 山

六九 やまぬる

八九 山

十三 山

二九 山

四九 山

六九 山

八九 山

二 山

四 山

六 山

八 山

九 心もあはれ
一十 心もあはれ
三十一 心もあはれ
五十一 心もあはれ
七十一 心もあはれ
九十一 心もあはれ
一十 心もあはれ

後撰歌四十九首

一 心もあはれ

三 柳のま

五 よひさる

七 月の所

九 のもせ 付しあはれや

一十 心もあはれ

三十一 心もあはれ

五十一 心もあはれ

七十一 心もあはれ

九十一 心もあはれ

十 やあはれゆく
二十 心もあはれ
四十 心もあはれ
六十 心もあはれ
八十 心もあはれ
九十二 心もあはれ

二 心もあはれ

四 心もあはれ

六 心もあはれ

八 心もあはれ

十 心もあはれ

二十 心もあはれ

四十 心もあはれ

六十 心もあはれ

八十 心もあはれ

九十二 心もあはれ

一

かき

二

かき

三

かき

四

かき

五

かき

六

かき

七

かき

八

かき

九

かき

十

かき

十一

かき

十二

かき

十三

かき

十四

かき

十五

かき

十六

かき

古詩五十首 終 第四卷

一

かき

二

かき

一

かき

二

かき

三

かき

四

かき

五

かき

六

かき

七

かき

八

かき

九

かき

十

かき

十一

かき

十二

かき

十三

かき

十四

かき

十五

かき

二 勝麻の真間

四 空の道

五 山鳥のこゝろ

六 わらわい

七 けいん

八 らんらん

九 月夜にささるる 付きまの
あはれ

十 せらりしもの

一十 てるてる 付くか

二十 しのぶ

三十 もの 付つる

四十 とき 付く

五十 やさしく

六十 こと 付く

七十 らん 御ま

八十 こと 付く
又ひら

九十 のて

九十 こと 付く

一 ね 付く

一 こと 付く

らん

二 こと 付く

あはれ 付く
あはれ

三 こと 付く

あはれ 付く
あはれ

四 こと 付く

あはれ 付く

五 こと 付く

あはれ

六 こと 付く

あはれ 付く

七 こと 付く

あはれ 付く

八 こと 付く

七世 六世 四世 二世 十三 八世 七世 五世 三世

八世 四世 六世 九世 一世 三世 五世

九册 一册 三册 五册 七册 九册 十五

〜

〜

井のの

か

〜

ひ

お

十四

二册

四册

六册

八册

〜

奥義抄中 釋

後拾遺

春

一 かも

〜

見と拾遺トイは

弾弾す

よ

二 かつ

〜

なほつゝのゆきもあつてもおきよなる
しほのつゝもあつてもあつても舞
とよありのきよもひわつてもあつても
しほのつゝもあつてもあつても

四 夏つ夜もももももももももももも

あつてもあつてもあつてもあつても
月照平沙夏夜数と云ん也

秋

五 あつてもあつてもあつてもあつても
しほのつゝもあつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても

六 あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても

わらわらと馬をりて

七 ものこころのちかき花よおきぬれぬ

まもりのちかき花よおきぬれぬ

八 色は儘馬薬のちかき花よおきぬれぬ

ちかき花よおきぬれぬ

のちかき花よおきぬれぬ

のちかき花よおきぬれぬ

九 ちかき花よおきぬれぬ

ちかき花よおきぬれぬ

伊みちかき花よおきぬれぬ

ちかき花よおきぬれぬ

ちかき花よおきぬれぬ

ちかき花よおきぬれぬ

誰謂水無心濃艶臨而激夢也とらふ

とらふ

九 ちかき花よおきぬれぬ

ちかき花よおきぬれぬ

是非花中偏愛菊はな此花用後更甚也とらふ

冬

十 ちかき花よおきぬれぬ

みづはけあつてふらふらふとせ

蜀江濯錦と云文ありの春部よ

これのしけをきくやいかにひつみ

よきとくすめいとくしん

とあまのしあはれはあつひとせ

錦の色れまもろく又よきとくしん

うきとくしんかろあつ又魚鱗の錦と云

をわりの二統ありの一魚鱗の錦と云

一魚鱗と焼てあついと錦よとせん也の

よき也

贊

士 せいしんかきりあつてあつてあつて

あつてひをいあつてあつてあつて

徳是北辰椿葉影再改と云文のんて 古大椿若

以八千歳為秋以八千歳為春也と云てんてん

はらさやちよあつてあつて

士 君らびちちよあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

泰山不讓土壤故成其高と云文のんて又古今

序のしんてん

十三

ふんふんふんふんふんふんふんふんふん
ふんふんふんふんふんふんふんふんふん

明王時者黄河一清とふふふふふふふふ
よせてよふふふふ

別

古 かしつちやうふのふのふふふふふ

ふんふんふんふんふんふんふんふんふん

揚波踏滑我送入老年孝門波高人送我何日

とふふふふふふふふふ

数

十五 とうげはつしきふんふんふんふんふん

つるふんふんふんふんふんふんふんふん

病つととつちの佛化縁つとつと入滅

とふふふふふふふふふふふふふふふ

沙羅林とつちの佛の入滅の時ふふふふ

のせふふふふふふふふの鶴林とつち

慈

ま かしつちやうふのふのふふふふふ

ふんふんふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふんふんふん

ふしとて 追考 尊いまもあつたのされいふふあぢ
七 けりあつてもあつたはなすもあつたはなす
らあつたのあつたはなすもあつたはなす
見ち僧馬樂れら也 けりあつたはなすもあつたはなす
あつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
そらあつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
よあつたはなす

雜

六 けりあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす

あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす

しら—月あつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす

伯牙鍾子期とてあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
鍾子期とてあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす
あつたのあつたはなすもあつたはなすもあつたはなすもあつたはなす

千 千のほろのあはれなる世の由

とてつらき世のあはれなる世

雪中放馬朝尋跡と云ふ詩のらん

北 一ひの世のあはれなる世

まことつらき世のあはれなる世

文集セウシに兼く晴雨打窓ハルアメウチマドと云ふ詩をよめる

一 是れ上陽人のよる玄宗と云ふ詩のらん

上陽人ジョウヤウジン十六してまのころのころ楊貴妃ヤウキキよる

かゝる世にたゞの世のあはれなる世

一 世のあはれなる世のあはれなる世

あゝ上陽のまのころのころのあはれなる世

あひはれ世のあはれなる世のあはれなる世

世のあはれなる世のあはれなる世

あゝ上陽のまのころのころのあはれなる世

祿山ロクサンと云ひらるる楊貴妃と云ふ詩のらん

一 ひの世のあはれなる世のあはれなる世

あゝ上陽のまのころのころのあはれなる世

あゝ上陽のまのころのころのあはれなる世

あゝ上陽のまのころのころのあはれなる世

わひぬみもれおらせいなやむひくおつん
とせらるる楊貴妃^{やうきい}のむじうーとひくひく
ふき紙^{ふき}かるとよきてまらきとてとすうす
ちちうらむとまもともおらーあせらるる
ひうおつひをひんよの命^{いのち}もぬ
あつんき紙^{かみ}ひくぬつてとんとひれ
と楊貴妃^{やうきい}うらむひう七月七日^{しちがつしちにち}長生殿^{ちやうせいだん}夜半^{よはん}無
久^くひそらおつひくぬのそらうてあつん
はひくおつひくぬのそらうてあつん
つねらむとまもともおらーあせらるる
きんおつひくぬのそらうてあつん
うらむひくぬの

拾遺集^{しゆいしふ}云

あつんおつひくぬのそらうてあつん
あつんおつひくぬのそらうてあつん

道濟^{だうけい}云

あつんおつひくぬのそらうてあつん
あつんおつひくぬのそらうてあつん

あつんおつひくぬのそらうてあつん
あつんおつひくぬのそらうてあつん
あつんおつひくぬのそらうてあつん
あつんおつひくぬのそらうてあつん

拾遺集奇云

おとこはよき事なれども
あはれなるものなり

昔もたらぬ事なれば
おとこはよき事なり

世に
おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

おとこはよき事なり

三

つらてわく花のうらをたちかへ

うらをたちかへ花のうらをたちかへ

法華經の不覺内秘裏有無價寶珠の意之佛

道よつとまへにれをとおとまへにまへに

苗 よろのよのよある花井れまへに

とまへにまへにのまへに

聖徳太子とまへにれまへにまへに

つらて文殊の弁よのまへにまへに

太子のまへにまへにまへに

いふる

五

すまへにれまへにまへに

まへにまへにまへに

太上天皇とまへにれまへに

信よりまへにまへにまへに

のまへにまへにまへに

まへにれ海とまへに船筏よまへに般若經の果

竟空とまへにゆへにまへにまへに

この理と佛神のまへにまへに

まへにまへにまへに

てわくまへにまへにまへに

矣

やまのすけりしるきけくはのなま

うらむし無きと死やふめりん

燕の太子丹とて人秦の始皇の時秦はゆき

如國は抄つてととらとみとゆつとて島が

らとけくたの馬は前れおひうん時の人と

つさうしどのさふ丹さうをわあふとてさけく

よやらまらみさすの抄らあらうとて角

ゆひさのさこしんをさうしんおほつてかえ

一しるのゆひぬるこも

若ひも死よりわさひとあをれん

人しきんを孫し思ひのこさる

逸文平軸々々金玉聲龍門原上土埋骨不

理名とて詩の意えさきと孫興云とてひ

人天台山の賦とほつてさかすつとて

さうは金玉の響れさうとてさる文とて

さうゆつとてさる

先んてさる人のかさる

さうてさるさる花のすさる

黄壤誰知我白頭獨懷君唯將老年淚一灑故

人支とて詩さる

ねむもくさくせりわのうたてをのよみ
しとよとよとよ

三 ちのまにけりてかたわらぬわのた

うのまをせうむや

琴のまをれととよまわの徳邊のま

琴の絃をせむきんはむかつらまをうらぬ

古詩より風排琴の上葛絃鳴とはくまの

笛 けり又にけりてへまをひもま

えんけのまをよれま

樂の中は春鶯轉とてふ樂のあきなるあ
轉のまをけつとよむ

五 けりてあまのあまのあま

まをまをまを

僧馬樂のまをまをまを

まのあまのまをまをまを

六 まをまをまをまを

あまをまをまを

まをまをまをまをまを

まをまをまをまをまを

あまをまをまをまをまを

悲 ああれあゝいふにむすのひさし
神とんくめひらく人とあはれいふ
あましくひらく人とあはれいふ
ひ神のみさるるにひらく人とあはれいふ
悲 もあはれいふにむすのひさし
法華經の二車えいばのちとくらく一味のあま法くわん經
經文と題よむとある年ハ老く

拾遺抄

春

一 ああれあゝいふにむすのひさし
あましくひらく人とあはれいふ
ひ神のみさるるにひらく人とあはれいふ
悲 もあはれいふにむすのひさし
法華經の二車えいばのちとくらく一味のあま法くわん經
經文と題よむとある年ハ老く

よきことありしなりと云ふ也
わが神は天照大神の御
孫皇孫命と葦原中津國の主とせん
と云ふは、ひびき響光神とひあし蜺聲邪神
なりと云ふは、あま天孫の御孫なりと云ふ

一 天孫の御孫なりと云ふは、
天孫の御孫なりと云ふは、
天孫の御孫なりと云ふは、
天孫の御孫なりと云ふは、

夏

二 神は天照大神の御孫なりと云ふは、

天孫の御孫なりと云ふは、

神は天照大神の御孫なりと云ふは、

世に天孫の御孫なりと云ふは、

具は天孫の御孫なりと云ふは、

三 天孫の御孫なりと云ふは、

天孫の御孫なりと云ふは、

天孫の御孫なりと云ふは、

天孫の御孫なりと云ふは、

天孫の御孫なりと云ふは、

天孫の御孫なりと云ふは、

やうなふくしんあつたかんのあつたふくしん
ひあしひもた月報ツキヒヨウのふくしん万葉の和歌
報ヒヨウのふくしんあつたかんのあつたふくしん
とくふ文の意世イコトもあつたかんのあつたふくしん
あつたかんの書カキもあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

あつたかんのあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん
あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

秋

あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

秋

あつたかんのあつたかんのあつたふくしん

あめれ下しそちの

山^{やま}喚^{よび}万^{よろ}歳^{とし}といふもれある世のうらむと

とのつらむとこの半世史記^{しき}のよみたる

六 みらよくつらむとこのよみたる

ふかきつらむとこのよみたる

漢武帝^{かんぶてい}の仙^{せん}の法^{ほう}をひきとけり

ん七^{しち}月^{げつ}夜^や漏^{ろう}は西^{さい}王^{おう}母^ぼと云^い仙^{せん}入^い紫^し雲^{うん}の

て武帝^{ぶてい}の兼^{けん}花^か殿^{てん}はつらむ時^{とき}は東方^{とうほう}朔^{しやく}と云

の御^み人^{ひと}はあつらむ時^{とき}は屏^{びん}風^{ふう}のうら

むらむと不^ふ記^きの兼^{けん}と云^い王^{おう}母^ぼと云^いと

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

つらむとひきとけり

けしきもつゝあぢりからうらむ舞

經云方千里の石を三年よて度梵天もく
りて三鉢の夜して撫蓋と一切をすうとく
つゆさなえられらるゝとあるは夫人ようきん
て殿上人のいぬまわされぬ衣とらふ又四位の
いぬまわしつゝいぬまわのつゆととも云はるゝと
りふのよとてむしりけり又服のいぬまわら
らゆともいぬまわのいぬまわとてむしりけり
ぬれともいぬまわの海人のいぬまわららゆとも
云わやのいぬまわのいぬまわのいぬまわ

別

八 けしきもつゝあぢりからうらむ舞
るいぬまわのいぬまわのいぬまわ

百詠云 農家似 啼粧花の病よぬまわらら
人のいぬまわのいぬまわのいぬまわ

九 けしきもつゝあぢりからうらむ舞
とあぢりからうらむ舞のいぬまわ

けしきもつゝあぢりからうらむ舞
あぢりからうらむ舞のいぬまわ
あぢりからうらむ舞のいぬまわ
あぢりからうらむ舞のいぬまわ

のちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

徳

十 ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

十 ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

十 ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

十 ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

ちていへばいふにさしつかへなく
おのづからいふにさしつかへなく

諫を以てしては、
海にあらざるは、

雜

由

或人云、敵の下都を伴氏とて、
伴氏は、

伴氏は、

伴氏は、

百葉

伴氏は、

伴氏は、

伴氏は、

伴氏は、

と云義きいおもものともし伴ともの氏うぢれもはひい

よあさるるん

十五 ちんれなるものららるるん

るるるるるるるるるるるるるるる

ら進まゝら廣ひろ雲のうものころそよあるるるるるるるるるるる

らこのふへそあまの紫むらさきのむれをひく南みなみ中ちゆう紀き云

紫むらさき雲のうも之の瑞すい膺おう堯ぎやうと生なま也なり雲のうも向むか於を北きた斗と兼かね南みなみ風

雲のうも瓏ろう漢のう之の上の上到いた堯ぎやう母のぼろ感か氣き披ひ袖のそで雲のうも愛あ之の下のした入い

堯ぎやう母のぼろ之の懷か堯ぎやうと妊をわらふ

共 くれあつてけへよとてさそつてさつ

あけいささされははのてろて

そつそつち黄きんぎょ菊ぎくるる氣せき和わのるるといよ路ぢ川

の物ものうわつちねひめてかまひく菊ぎくもさるる

氣かへひるるるるるるるるるるるるるるる

りあへ或ある物ものも一ひと片は菊ぎくとさるるるるるるるるるる

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

ちんれなるものららるるるるるるるるるる

らるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

らるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

夕べはついでに神を祀りて世をあらんことを
 ともく命をさしつゝとてかたみの奏
 せりて人の魂つらうとて海に身をま
 せりてつゝ小使をのこけりて死なせり
 といふことなほいふに教をあらん神の
 護言ふといふも行者とはいへり
 ともわらぬよとてあはれなるといふこと
 考とみとてさきひきめりていふこと
 後行者のつとめとて護法といひて神と
 ありてとて廣へりといふこと金翠山の
 名をいふといふこと

十六 久々の月ればもれりて

久々の月ればもれりて

折桂葉と云ふ 月の香枝の道土

折桂葉と云ふ 月の香枝の道土

南州八桂樹 わの生月中月満る八桂樹の生

世月注云 月中玉兔の月陰之精成 獸兔

世月注云 月中玉兔の月陰之精成 獸兔

光

光

かゝる物どもをばさかすにすべし

とこそ物ものの總つら合あはせらるるとはよからしめと

とこそいひつゝとよある也なりとこそいひ松まつのともを

人ひと有りあり有あり皇みかど子こ世よ球たまとして山さん野のは遠とほむ

終つひにとも結むすぶとつら松まつとよとよあつと

心こころなりつら海うみのしるはひとこそいひつゝ

まゝにせしむるは又またかかひのてし

二ふたつとこそいひてししとこそいふ人ひとありとこそい

葉はの二ふた世よれとこそ趙しやう高かうとこそいひ一ひと大臣だいじんの世よ球たまと

おととつらとつら威いのつととつらと

あつとつらつらとつらとつらとつらとつらと

一ひととつらとつらとつらとつらとつらとつらと

よとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

もとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

よとつらとつらと

光ひかり一ひとつらとつらとつらとつらとつらと

つらとつらとつらとつらとつらとつらと

西にし守まもりて經きやう儀ぎ養やうとつらとつらとつらとつらと

花はなのつらとつらとつらとつらとつらとつらと

とあるを以て千年を以てつらさのらえ
かまひし^し昨日の^{昨日}の法をえんもりのえをじ
うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}
のえん^{のえん}のえん^{のえん}のえん^{のえん}のえん^{のえん}のえん^{のえん}
うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}
うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}うんた^{うんた}

新

井

